

續 明暗

水村美苗



續 明暗

水村美苗

筑摩書房

續 明暗

平成二年 九月一日 初版第一刷發行
平成二年 十月三十日 初版第四刷發行

著者 水村美苗

發行者 關根榮郷

發行所 株式會社筑摩書房

東京都台東區藏前二ノ六ノ四

郵便番號 一一一

電話 〇三五六八七二六八〇（營業）

〇三五六八七二六七〇（編集）

振替東京六四一二三

印刷所 三松堂印刷

製本所 積信堂

© Minae Mizumura 1990

ISBN 4-80-80294-0 C0093

續
明
暗

百八十八

津田は清子の剃ひいてくれた林檎りんごに手を觸ふれなかつた。

「貴女あなたいかがです、折角せつかく吉川の奥さんが貴女のためにといつて贈たまつてくれたんですよ」

「さうね、さうして貴方あなたが又わざわざそれを此所迄ここまで持つて来て下さつたんですね。その御親切に對たいしても頂たまかなくつちや悪いわね」

清子は斯かう云ひながら、二人の間にある林檎の一片ひときれを手にとつた。然しかしそれを口へ持つて行く前に又訊きいた。

「然しかし考かんへると可笑おかしいわね、一體何いったいどうしたんでせう」

「何が何なにうしたんです」

「私吉川の奥さんにお見舞を頂かうとは思はなかつたのよ。それから其お見舞をまた貴方が持つて来て下さらうとは猶更なほさ思はなかつたのよ」

津田は口のうちに「さうでせう、僕でさへそんな事は思はなかつたんだから」と云つた。其顔そのを睨にと見守つた清子の眼に、判然はつぜんした答を津田から待ち受けるやうな豫期よきの光が射した。彼は其光に對する特殊な記憶を呼び起した。

「ああ此眼このだつて」

二人の間に何度も繰り返された過去の光景シーンが、ありありと津田の前に浮き上つた。其時分そのの清

子は津田と名のつく一人の男を信じてゐた。だから凡ての知識を彼から仰いだ。あらゆる疑問の解決を彼に求めた。自分に解らない未來を擧げて、彼の上に投げ掛けるやうに見えた。従つて彼女の眼は動いても靜であつた。何か訊かうとするうちに、信と平和の輝きがあつた。彼は其輝きを一人で専有する特權を有つて生れて來たやうな氣がした。自分があればこそ此眼も存在するのだとさへ思つた。

二人は遂に離れた。さうして又會つた。自分を離れた以後の清子に、昔の儘の眼が、昔と違つた意味で、矢つぱり存在してゐるのだと注意されたやうな心持のした時、津田は一種の感慨に打たれた。

「それは貴女の美しい所です。けれどももう私を失望させる美しさに過ぎなくなつたのですか。判然教へて下さい」

津田の疑問と清子の疑問が暫時視線の上で行き合つた後、最初に眼を引いたものは清子であつた。津田は其退き方を見た。さうして其所にも二人の間にある意氣込の相違を認めた。彼女は何處迄も逼らなかつた。何うでも構はないといふ風に、眼を餘所へ持つて行つた彼女は、それを床の間に活けてある寒菊の花の上に落した。

眼で逃げられた津田は、口で追掛けなければならなかつた。

「なんぼ僕だつて唯吉川の奥さんの使に來た丈ぢやありません」

「でせう、だから變なのよ」

「ちつとも變な事はありませんよ。僕は僕で獨立して此所へ來ようと思つてゐる所へ、奥さんに會つて、始めて貴女の此所にゐらつしやる事を聽かされた上に、ついお土産迄頼まれちまつたんです」

「さうでせう。さうでもなければ、何う考へたつて變ですからね」

「いくら變だつて偶然といふ事も世の中にはありますよ。さう貴女のやうに……」

「だからもう變ぢやないのよ。譯さへ伺へば、何でも當り前になつちまふのね」

津田はつい「此方でも其譯を訊きに來たんだ」と云ひたくなつた。然し何にも其所に頓着してゐないらしい清子の質問は正直であつた。

「それで貴方も何處かお惡いの」

津田は言葉少なに病氣の顛末を説明した。清子は云つた。

「でも結構ね、貴方は。さういふ時に會社の方の御都合が附くんだから。其所へ行くと良人なんか氣の毒なものよ、朝から晩迄忙がしさうにして」

「關君こそ酔興なんだから仕方がない」

「可哀想に、まさか」

「いや僕のいふのは善い意味での酔興ですよ。つまり勉強家といふ事です」

「まあ、お上手だ事」

此時下から急ぎ足で階子段を上つて來る草履の音が聽えたので、何か云はうとした津田は黙つ

て様子を見た。すると先刻とは違つた下女が其所へ顔を出した。

「あの濱のお客さまが、奥さまにお午から瀧の方へ散歩にお出になりませんか、伺つて来いと仰しやいました」

「お供しませう」清子の返事を聞いた下女は、立ち際に津田の方を見ながら「旦那様も一所に入らつしやいますし」と云つた。

「有難う。時にもうお午なのかい」

「ええ只今御飯を持つて参ります」

「驚いたな」

津田は漸く立ち上つた。

「奥さん」と云はうとして、云ひ損なつた彼はつい「清子さん」と呼び掛けた。

「貴女は何時頃迄お出です」

「豫定なんか丸でないのよ。宅から電報が来れば、今日にでも歸らなくつちやならないわ」

津田は驚いた。

「そんなものが来るんですか」

「そりや何とも云へないわ」

清子は斯う云つて微笑した。津田は其微笑の意味を一人で説明しようと試みながら自分の室に歸つた。

百八十九

座敷は何時の間にか片附いてゐた。朝、繪端書を書く時に小机の前で使つた座蒲團が、庭を正面に、座敷の眞中に火鉢と共に整然と据ゑられてゐる。津田は室に入ると後手に障子を締めるなり、其所へ行つて胡坐を掻いた。眞直視界に入つて來た硝子戸の向うの築山は、今は既に午の光を受けてゐた。ほんのしばらく空けてゐた丈なのに、何だか見慣れない所へ迷ひ込んだやうな氣がした。

津田は腕を組むと、劇しい刺激を受けた後の人間のやうに凝と眼を閉ぢた。

晝間は雑多な音に邪魔されるのか、斯うして眼を閉つてみても、例の噴水の音は殆んどしなかつた。其代り鶯の鳴き聲が煩さいほど聽えて來る。朝、風呂場の傍にゐたのが裏山の方へ回つたのかも知れなかつた。

やがて先刻津田を清子の所へと案内した下女が膳を持つて入つて來た。

「お知合だつたんですね」

給仕をしながら膳の向うから女は云つた。朝食時、津田が空つ惚けて清子の事を色々訊いてゐたのに氣が附いた口調だつた。

「左うだよ」

津田は平然と應へた。さうして附け加へた。

「久し振だつたんだが、相變はらず綺麗だつたんで感心した」

「お客さんも随分ですねえ」

「随分て何がだい」

下女はそれには取り合はずにやにや笑ひながら訊いた。

「お客さんの奥さんと何方がお綺麗ですか」

「お客さんの奥さんて？」

「お客さんの奥さんです」

「僕のかい」

「左うです」

「僕の奥さんねえ」

「屹度、お綺麗な奥さんがゐらつしやるんでせう」

「居るやうに見えるかね」

「感じで判ります」

「君も天鼻通かね」

下女は聲を立てて笑つた。能く笑ふ女であつた。

「これは此邊で獲れるのかい」

津田は話題を變へるために朱塗りの膳の上を指した。

宿の食事にしく器を並び立てた中に四角い平皿があり、其上に岩魚にしては小さ過ぎるやうな肴が載つてゐた。何といふ名の魚だか、女が答へるうちに判るだらうと思つてゐると、女の方でも「此邊のは」とか「今獲れるのは」とかいふ云い方をする。それでゐて説明丈は詳細に互つてゐた。津田は女に調戲はれてゐるやうな氣がしたが、女は存外眞面目な顔であつた。改めて訊くのも馬鹿馬鹿しいと適當に相槌を打つてゐたので、魚の名は判らず仕舞であつた。

空腹を感じない儘始めた食事はぢきに終つた。

此下女は午からの散歩の話は聞いてゐないらしい。「それではご悠くり」と其儘膳を下げて消えてしまつた。津田は獨り廣い座敷に取り残された。耳を澄ましても廊下の方は森として物音一つ聽えて來なかつた。清子は女だから食事が緩いのかも知れなかつた。

津田はごろりと仰向けになつて袂から出した敷島を吸ひ始めた。

仰向けになるとまだ新しい天井の所所に、其所丈雨に濡れたやうな濃い染みのあるのが見える。能く見るといづれも地下足袋の形をしてゐるやうであつた。丸で泥棒の通つた跡みたいだと、津田の眼はぼんやりとその跡を追つた。藍色の烟がそれを掠めて立ち騰つて行つた。

百九十

知らずに緊張してゐたのが突然弛んだものと見える。すると、今まで津田の頭をちらちらしてゐた清子の室での光景が、堰を解かれたやうに、出鱈目な順序で彼の眼の前に押し寄せて來た。

それらは断片的な影像であつた。其所には林檎を剝く清子の白い指があつた。見慣れぬ二個の寶石があつた。外に開いた女の長い袂があつた。揃ひの縮緬の座蒲團もあり、床の間の寒菊や、二人を隔てる角火鉢や、衣桁に掛けられた華麗な絹などもあつた。此室とは趣を異にする庭の向うに、山の黄葉が鮮やかに映え、其黄葉を背景に、黒い光澤やかな廂髪と、靜かに輝く眼と、津田にものを云ふ口があつた。その口が「ただ貴方はさういふ事をなさる方なのよ」と云つた。

平凡な再會であつた。

然し其所には彼を刺激する要素が充分過ぎるほどあつた。頭の中を自由に縦横する濃厚な影像を前に、津田の精神は纏まつた思考をする所にはなかつた。斯う出るべきであつたといふ後悔も湧き上がらなければ、今後何う出るべきかといふ案も出て來なかつた。彼はただ、強い色がはげしく錯綜して幾通りもの模様を織りなす中に、酔つた人のやうに陶然としてゐた。

三本目の數島を終へてもまだ清子の方からは何も云つて來なかつた。

今の女を呼び戻して清子の所迄使ひに遣らうかとも考へたが、何ういふ風に散歩の件を清子に云ひ出したものだか解らなかつた。散歩に誘はれたのは清子の前ではあつたが、散歩に誘つたのは清子自身ではなかつた。清子自身に誘はれた譯でもないのに、「それでは参りませうか」と下女を介して云はせるのは、圖迂圖迂し過ぎるやうであつた。かといつて「御一所して可いですか」とわざわざ訊きに遣るのは、何か自分の拘泥りが見えるやうで厭だつた。下女の手前もあるので猶更屑よしとしなかつた。

午飯が済み次第清子が使ひを寄越すだらうと勝手に極め込んでゐたのが、段段と怪しくなつて来た。それが蟲の好い思ひ込みだつたやうな氣がする。清子の方ではあの時顔を出した下女と津田との遣り取りを、行掛り上交された、時候の挨拶程度にしか受け取つてゐないのかも知れなかつた。二人の間に横はる入り組んだ過去を知らない婢の云ふ事など、眞に受ける必要はないといふ腹かも知れない。もう一步踏み込んで考へれば、自分からは一言も添へなかつたのは、津田の同行を望んでゐないといふ彼女の意志を露はにしたのかも知れなかつた。

さう斯う考へてゐるうちに、時間の經つて行くのが如何にも業腹であつた。今すぐにでも跳ね起きてみんなをあちこち捜し回りたいといふ衝動と、やはり己れを尊んで斯うして悠長に構へてゐたい氣持とが鬨ぎ合ひ、太平樂な外觀と裏腹に、津田の心は愈落ち附かなかつた。不圖廊下で人の氣配がすると、「御免なさい」と障子が開いた。

上半身を起こすと番頭自身が敷居に手を突いてゐた。

「皆さんお待ちですけれど、何うなさいます」

「お待ちつて何處でだね」

番頭は首をぐるつと横へ回した。

「門の脇に松の木が並んでるんで」

昨夕馬車が乗り入れた門の事らしかつた。

「ちやあすぐ行かう。先にさう云つて傳へて下さい」

「へえ」

番頭に心の弾みを見られないやう、津田はわざとのろろと立ち上がらねばならなかつた。

百九十一

玄關を抜けると、石垣に囲まれた階段に出た。先の方に旅館の石門が見え、其傍に、昨夕は氣が附かなかつたが、成程見事な枝振りの松の木が二本並んで立つてゐた。一足先に着いた番頭は、今朝の口髭の男を相手に何やら仔細らしく話してゐる。松の下には黒く錆びた鐵燈籠があり、隣に置かれた、茶店にでもあるやうな床几には女達が腰を卸してゐた。

津田が近附くと先づ夫婦者の女が振り向いた。清子から既に話を聞いている所爲か彼の顔を認めると、昨夕の風呂場とは打つて變はつた調子で素早く愛嬌を湛へて會釋した。

清子も續いて振り向いた。

「お出にならないのかと思つてたのよ」

清子は肩掛に埋めていた顎を寒さうに外に出した。日本の物のやうではない、縞模様のお厚い毛織ものである。見覚えのない所を見ると、關に嫁いだから手に入れた物かも知れなかつた。

「いやあ」

「もう寒くつて。お二人もすっかり冷えてお仕舞になつたわ」

「そりやあどうも」

津田は夫婦に向つて頭を下げた。

「でも、斯んな所に集まるつて聞いてなかつたぢやないですか」

「左うなのよ。そりや左うなの」

清子は彼等の方に向き直つた。

「私、場所をちやんと申し上げてゐなかつたの」

「それぢやあ仕方ないぢやないですか」と男が津田を庇護ふやうに笑ひながら云つた。

「本當に」

清子自身も苦笑してゐる。

「でも何だか自然にお解りになるやうな氣がしてたもんだから」

「無責任だなあ」

津田は磊落を装つた。清子が場所を指示しなかつたのは矢つ張り來て欲しくなかつた所爲かも知れない。然し其後でわざわざ番頭を寄越したのは、それでは悪いと思ひ直したのかも知れなかつた。

「津田さんと仰しやるの」

清子は立ち上がった。女も續いて立ち上がった。女は近くで見ると二十七八は行つてゐるやうであつた。束髪は朝の儘であつたが、今は着物の上に妙にびかびか光る地の錆朱のコーートを羽織つてゐる。

「主人の同級生で、前からの友達」

夫婦はそれぞれ頭を下げた。此紹介には何處にも偽はなかつたが、それは重要な事を抜かしてゐる點において眞實でもなかつた。

男の名は安永といつた。女の方は貞子ださうで、派手な外觀に合はない尋常な名であつた。

「何時も、お二人とは此松の下で落ち合ふ事になつてゐるの」

「今更聞いても仕方ないでせう」

津田は清子の言譯にわざと不服さうに應じた。みんなは聲を出して笑つた。

「手術をなさつたさうですね」

安永といふ其男が津田の身體に一瞥を呉れながら云つた。

「はあ」

津田は簡潔に返答した。女達の前で自慢にもならない自分の病氣を殊更話題にするのは憚られた。然し相手は津田の思惑には頓着なかつた。

「手術たあ氣の毒だ。——で、何處ですか」

「腸の奥の邊です」

男の視線は其儘津田の兵兒帶の下の邊りを彷徨つた。

「腸ですか」

「まあ、左右です」